2024 年度　各授業学習目標・授業目標　　科目名：アート思考アドバンスト

高等部教育目標
イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う
探究型カリキュラム教育/学習目標
SDGs の達成を目指し、Mastery for Service を体現する世界市民の一員として、国内外の社会に自ら関わり貢献できる力を育成する/身につける
探究型カリキュラムにおける 5 つの学びの方針　Five Principles for Learning
1. 自分事として　2. 社会/実践を通して　3.知識を大事に　4. ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを通して　5.生徒・教員が共に <ｵｰﾅｰｼｯﾌﾟ/一人称>　<PBL 型/ｱｸｼｮﾝ>　<自ら得る知識/高める関心>　<自分/他者のやりとり>　<共に探究する関係性>
上位学習目標
【知識・技能】 ・アートの理解に必要な歴史的背景やモチーフ・技法・展示方法などを適切に用いることができる ・社会課題や哲学的言説について理解し、アートと関連させて説明することができる 【思考力・判断力・表現力】 ・アートを見て感じ取ること（＝感性）を通して社会課題を多角的にクリティカルに捉え、自分の考えを構築することができる ・物事に一つの解答を求めるのではなく、複雑なまま受け入れて熟考することができる ・自分自身の価値観やモノの見方を俯瞰し、他との関係性のなかで相対的に意味づけることができる 【学びに向かう力・人間性】 ・自分自身を通して自由に世の中を捉えることで、自分の未来の可能性を開いていくことができる ・他者の表現や言説を自分の価値観に照らして、主体的に想像することができる ・作家が内省を突き詰めて作品と対峙することを追体験することで、内在する自己の有りように向き合う姿勢を身につける
下位学習目標
【知識・技能】 ①アート思考と論理思考の違いを理解し、用語として使い分けることができる。 ②対話型鑑賞や作品分析に必要な情報を集め、目的に応じて選択することができる。 ③アートにまつわる哲学的言説や時事、歴史的事実などについて自分の言葉で語ることができる。 【思考力・判断力・表現力】 ①アートとそうでないものとの違いについて鑑賞者と作品との相対性やコンテクストによる関係性を意識して考察することができる。 ②一つのアート作品についての情報を総合し、自分なりの分析を施すことができる。 ③アートプロジェクトや文化政策、パブリックアート等を通してアートに関わる社会課題について推察し見通すことができる。 【学びに向かう力・人間性】 ①より多くのアート作品や文献に触れようとすることができる。 ②一つの作品やプロジェクトに関する学びに対して時間をかけることができる。 ③自らの考えを昇華させるために、他者とアートについて語り、互いの価値観を認める姿勢を身につける。

授業日	9/24(火)	2学期授業回数	3回目 / 全10回

本時学習目標	主なターゲット【知識・技能】②　【思考力・判断力・表現力】①②③【学びに向かう力・人間性】②③ 本時の具体的な目標 ・現代社会の課題をシニカルにかつユーモラスなアートの表現とその意図について理解することができる。 ・他者の研究の内容を批判的に評価することにより、自己省察につなげることができる。
時間授業内容	5時間目 『「問い」から始めるアート思考』を通読し、Chim↑Pomのスーパーラットの概念、生命倫理を問われかねない社会風刺の作品を通して現代アートの表現とその意図についてのプレゼンを行った。「社会に向けられた問いとアーティストの意志」がアートの成立には不可欠であるというポイントを押さえた。 6時間目 グループ研究の中間発表プレゼンを行った。「排除アート」班は街に設置されているオブジェやベンチの装飾が社会的弱者だけでなく一般の市民をも排除することになってはいないかというフィールドスタディの報告が中心だった。「AIとアート」班はAIと創作表現活動の関係における問題点を整理し、特に著作権や表現としての独自性について注目していた。「多様性とアート」班は、障がい者アートを展示する行政のずさんさ、一般のアート作品との扱いの違いについて具体的な展示会を分析することによって整理していた。
評価方法	・以下のルーブリックに基づいた相互評価、教員評価によって数値化する。

観点①　研究の目的が明確であり夏休みの取り組みが仮説の検証に生きる内容となっている。	
5点	何を明らかにするのか、解決するのかがはっきりしており、立てた仮説と関係のある活動が行えている。
3点	何を明らかにするのか、解決するのかはわかるが、活動の内容が仮説を明らかにするには至っていない。
1点	何を明らかにするのか、解決するのかも明らかでない、または仮説を立てずに行動のみにとどまっている。
観点②　夏休みの取り組みが表面的な行動にとどまらず「分かったこと」から「分析や考察」に繋げることができている。	
5点	取り組みの結果が分かりやすくまとめられており、そこから何を考え明らかにしたのかがはっきりとしている。
3点	取り組みの結果はわかりやすいが、そこから何を考え明らかにしたのかが分かりにくい。
1点	とにかく夏休みに「何かをした」にとどまり、研究活動として意味あるものとなっていない。
観点③　一部の人だけでなく、分析と考察やプレゼン準備により多くのメンバーが関わることができている。	
5点	グループの構成メンバー全員が何かしらの役割を担って取りんだということがわかる。
3点	複数の人が関わっていることが伝わるが、特定の人の役割に依存しているような比重である。
1点	プレゼン発表をしている人、またはスライドを作った人しか稼働していない。
観点④　夏休みの取り組みを裏付ける「文献資料やデータ」を組み合わせて活用することができている。	
5点	具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータをエビデンス（根拠）として分析している。
3点	具体的な参考文献や論文、または自分たちで収集したデータを取り上げている。
1点	特に参考文献や論文、データを用いた発表になっていない。
観点⑤　夏休みの取り組みが自分たちの枠を超えて社会の中で検証するものとなっている。	
5点	実際に街へ出て調査をしたり、関係者にインタビューするなど手元の資料だけに留まらない活動となっている。
3点	手元の資料だけを使って広く社会について考察しようとしている。
1点	自分たちの話合いの域を出ていない。

宿題指示	次回のプレゼン担当班は準備をしてくる、 また、AI班はデジタルアートの鑑賞、幼児教育班は初等部での対話型鑑賞ワークショップを企画するよう指示した。 アートライター賞に出品する。（手続きを完了して提出した原稿を印刷してくること）